

～液状化と岸壁の被災の謎に挑む～

「実大試験重力式岸壁の地震時挙動観測プロジェクト」講演会を開催しました

港湾研究室

～液状化と岸壁の被災の謎に挑む～「実大試験重力式岸壁の地震時挙動観測プロジェクト」講演会が、9月20日（火）に北海道開発局と（独）北海道開発土木研究所の共催により、第1合同庁舎2階大講堂において開催されました。本講演会は、北海道開発局が重力式岸壁の新たな耐震設計法の確立を目的とし、釧路港西港区第4埠頭に実大試験岸壁を設置して行った地震時挙動観測プロジェクトの成果を報告するものです。2003年十勝沖地震をはじめとする地震時挙動データの観測に成功し、本年3月をもって現地観測を終了したことから、これまでの観測データの解析結果等と今後の耐震設計の方向性について報告したものです。講演会では、プロジェクトと並行して組織された「港湾構造物の耐震性調査検討委員会」の各委員より基調講演及び報告が行われました。最初に井合京都大学教授より、「港と地域防災を考える－阪神淡路大震災で港はどう使われたか－」と題して基調講演が行われた後、北海道開発局笹島空港課長より、プロジェクト開始から成果取り纏めに至るまでの経緯を、そして窪内港湾研究室長より、地震時挙動観測システムと2003年十勝沖地震動をはじめとする観測地震動の概要を、豊橋技術科学大学三浦助教より、2003年十勝沖地震動による試験ケーソン滑動時のケーソン及び背後地盤の地震時挙動に関する解析結果が報告されました。さらに、新たな耐震設計法の方向性を示す報告として、まず東北大学風間教授より、地震時における地盤と構造物の動的相互作用の考え方についての報告があり、それを受けて（独）港湾空港技術研究所の菅野構造震動研究室長より、現地観測データに基づき地震時におけるケーソンと背後地盤の地震時相互挙動を考慮した耐震設計法の考え方について報告がなされました。

報告内容については、構造物の地震時挙動の観測解析結果を中心としたやや専門的な内容でありましたが、近年の地震が頻発する状況を反映し、参加した海外研究者を含む専門技術者を中心とした170名の方々には最後まで熱心に聴講して頂きました。



基調講演を行う井合教授



講演会の模様